住友雄資 Y. Sumitomo 在室

研究室へようこそ 4

日本で一番小さな社会福祉学部の大きな先生

住友雄資 教授

社会福祉学部

すみとも・ゆうじ

社会福祉学部教授。博士（臨床福祉学）
福祉現場で、精神障害者の地域生活支援をおこなう。専門は精神障害者福祉とソーシャルワーク。「改訂 新しいソーシャルワーク」（中央法規,2006）、『精神保健福祉援助技術総論』（中央法規,2007）ほか。精神保健福祉士試験委員、高知県社会福祉審議会委員長。個人ホームページを開設

http://www005.upp.so-net.ne.jp/smtm/

ないものがあるようになった。

住友雄資教授の研究室には、三年前のバレンタインデーに学生から贈られた似顔絵チョコが今でも大切に保管されている。「さすがに自分の顔は食べられないもんです」。身体も心も大きく、頼りがいがある。体重は社会福祉学部の機密事項らしい。ちょっと口うるさいが、面倒見がよく、学生に人気の先生だ。

住友教授の専門は精神科ソーシャルワーク論。高知女子大学の教壇に立つ一方、精神保健福祉士の質や地位向上を養成の立場からめざす「日本精神保健福祉士養成校協会」の理事兼事務局次長でもある。精神保健福祉士国家試験委員も務めている。

小学校・中学校を広島県福山市で過ごす。中学時代、水泳選手として広島県第3位に輝いた。高専に進み、電波通信学を学んでいたが、どうも自分には向いていないと中退。一年あまりフリーター生活を送った後、日本福祉大学に入学した。それも、なんとなく受験したという感じ。だから、あまり真面目に学校にも行っていなかった。そんな二年生の終わり、社会福祉の歴史に関する集中講義があった。「社会福祉がどういうふうに成立して来たのかという話の中で、その時にその先生は『ないものがあるようになった』と。本来、資本主義の論理にはお互い助け合うという社会福祉の考え方はありませんが、貧富の差ができる過程の中で社会福祉という仕組みを国は作らざるを得なかったわけです。その一言が心の琴線に触れたのでしょうね。それをきっかけに勉強をするようになりました」

卒業後、同大学院修士課程に進んだ。また北海道医療大学大学院博士課程で博士（臨床福祉学）の学位を得た。精神障害者復帰施設の草分け的存在、埼玉県の「やどかりの里」で精神科ソーシャルワーカー（現在の精神保健福祉士）としての実践経験もある。

日本で一番小さな社会福祉学部だけど、社会福祉士・精神保健福祉士の合格率は高い。

現在、日本には統合失調症、うつ病、アルコール依存などの精神障害者は二百万人以上いると言われていて、そういう人たちが病院を退院し、地域で生活していけるように援助していくのが精神保健福祉士だ。「まだまだ、差別やいろんな偏見がある中で、本人だってなぜ、こんな病気になったのかという気持ちがある。そういう時に、そこで一緒に寄り添いながら一歩一歩進めていくような人がそばにいないと無理ですね。困った時にすぐ相談を受けられる体制を整えるのが、我々の仕事です。」

社会福祉学部で取得できる受験資格は精神保健福祉士だけでなく、社会福祉士もある。これがなかなかの難関。高知女子大学は、昨年、全国百六十一校のうち十八位。現役では十三位（ちなみに精神保健福祉士の現役合格率は約九〇%）。四国ではナンバーワンの合格率を誇っている。平均合格率二十八%と言われる中、六十九%という高い合格率は、学生一人一人に寄り添いながら教育をおこなってきた成果とも言える。

「高知女子大学社会福祉学部は、日本で一番小さな社会福祉学部です。三十名の学部なんで、他にはありません。その中で何が一番メリットかと言うと、先生と学生との距離が近いこと。一人一人の学生の顔と名前が一致しているし、よくわかっています。それがあるから個別に向き合える。」

一緒にバーベキューや宴会もおこなう。フェイス・ツウ・フェイスのかかわりをとても大切にしている。そこから教科書以上のことを学んでほしいというのが、住友教授たちの願いだ。

援助者として、人に助けられる心地よさを体験し、覚えてほしい。

住友教授の研究室には、学生がよく遊びにやってくる。そこで先生はさまざまなことを伝えていく。言葉をやりとりしながら、自分を見つめ、育てる教育だ。人の心にふれる社会福祉士や精神保健福祉士は、まず、自分を知らねばならない。

「援助者になる時に、一番大事なのは、教員からも含めて、人から助けられる心地よさを体験し、覚えてほしい。そして今度、自分が援助者になった時、そのことを踏まえて相手にその心地よさを提供してほしい。単なる教科書で援助の方法はどうだこうだというよりも、一人の人間としてきちんと向き合っていける関係をどう作るかがまず大事」と、住友教授。

相手の立場に立って、相手が何を望んでいるかや相手の状況を踏まえ、ニーズを的確にとらえて福祉サービスを提供する。それには相当のトレーニングが必要だ。「私だって、初めからそれができていたわけではありません。でも、そういう人たちと向き合ってみると、生活していくうえでの問題の構造などがみえてくる。同時に関係性も構築していく。信頼されることって、すごく大事。しかし関係性は理屈や理論だけでは説明できない。だから、私は学生に恋愛をしなさいと言います（笑）。そこから自分という人間が見えて来る」。そう言いながら、実は心の中で父親（兄か？）の気持ちで、すごく心配しているらしい。

学内をふらふらと歩いて回る学内巡回指導。

住友教授は、忙しい合間を縫って学部内をふらふらと歩く。そこで学生を捕まえてお喋りをする。「学生と喋ること自体が楽しいのですが、援助職の基本は対話なんですよ。そのお喋りの中で、授業や学校に対しての満足度や悩み、評価も聞ける。いろんな情報を集めて、それを授業や学内行政に生かしていくわけです。学生に良い教育をするには、しっかりとした教育環境を作っていくことが不可欠。それも私の仕事。他の先生たちの研究室にもふらりと行きます。自分では"学内巡回指導"と、勝手に呼んでいます。」

全国各地で実習している学生たちの"学外巡回指導"にも出かける。また『精神ソーシャルワーク』という本をはじめ、教科書や専門書などの著書も数多く、出版社からのオファーも多い。その他に学会や関連団体も含め、年間六十～七十回、飛行機に乗って全国を飛び回っている。高知女子大学だけに限定されない活動も多くある。「全国の教員同士で仕事をおこない、たとえば研究チームをリードすることを通じて、日本の精神保健福祉の発展に貢献したり、よりよい状況に変えていく。制度や仕組みもそうだけれど、研究レベルの向上や専門職の質的向上にも積極的に関わっています。良い研究をしていないと、良い教育はできませんので。」

高知女子大学では、高齢化が進む高知県の現状を踏まえ、今後、より高い技術と専門性を持ち、リーダーシップを発揮できる介護福祉士の養成にも乗り出していく予定。住友教授はますます、忙しくなりそうだ。

「住友先生は業績もすごくいけれど、人柄もすごくよくて、学生や教員ともいい関係づくりをされています」と、同じ学部の西梅先生の住友評。月～金は授業等で忙しいので、自分の研究時間はもっぱら土日。どうしても忙しい時は居留守をつかうこともあるが、研究室を訪ねてくる学生に「先生、ばれてますよ」と言われるらしい。

SEMINAR STUDENTS

我が住友ゼミでは、雑談を中心に…（笑）社会福祉領域で各自興味のある分野の研究をすると同時に、援助職にとって必要な技術、主に「自分を知る」ということ等を学んでいます。先生はゼミ以外の時間でも私たちの悩みにじっくり耳を傾け、そこから真意を汲み取って的確なアドバイスをしてくれます。他のゼミ生からは「住友ゼミは大変そう！」と言われますが、それは誤解です。ゼミ生同士はもちろんのこと、先生との仲も良いゼミでは、定期的にゼミ旅行や飲み会をしています。「相思相愛のゼミ」ということでは学部内ナンバー1と言っても過言ではないでしょう!!!

松井雪美（社会福祉学部三回生）